岡山醫學會雜誌第三百八十一 號

大正十年十月三十一

日發行

潰瘍ノ胃液分泌ニ就テ

原

著

胃

緖

ラ支持セラル、二至レリ。 然レドモ亦エーワルド 潰瘍ノ發生ニ對シテ有力視セラレ而シテ此說ハリーゲル

タルマ

フーベル

性現象ナリト見做ス人ナキニアラスロ

詳細ニ観察シタル後更ニ同犬ニ就キラ開腹術ヲ行ヒ 幽門部ヲ露出シ其前壁ニ於ラ三乃至四仙迷ノ切開ヲ作リ後壁粘 ニ就キテ一定試食ヲ奥へ 其際毎十分間ニ小胃ヨリ分泌スル胃液ノ分泌量毎十分間ニ分泌スル各部ノ酸度等ニツキテ 以此余等ハ豫メ中等大ノ犬ヲ選ビラ 所定ノ方法ニヨリテパウローフ氏小胃手術ヲ施シ術後一定ノ期間ノ後此ノ犬

I

齋藤、小林―胃潰瘍ノ胃液分泌ニ就テ

小 林 齋

精

郞

過酸症ノ胃潰瘍ニ對スル原因的關係ヲ認メズシテ反テ結果的關係ヲ力說シ過酸症ヲ潰瘍養生後ニ於ケル潰瘍ノ過酸 ロイベ氏胃潰瘍ト胃液分泌異常トノ間ニ密接ナル關係アルコトヲ唱導セシ以來 過酸症ハ胃粘膜ノ抵抗減少ト共ニ レンアルット等ノ諸家ノ如ク全然反對ノ意見ヲ有シ コルチンスキー ヤウォルスキー等ノ諸家ニヨリ 孫 兵 衛

六九四

除若シクハ太キ結紮絲ニテカタク結紮シ後チ胃壁及ビ腹壁ヲ縫合シ膜ヲ切開創外ニ飜轉シ此部ノ粘膜ニ於テ約五十錢銀貨大ノ粘膜ノ切

手術ノ翌日又ハ兩三日目ョリ所定ノ方法ニテ胃液分泌ノ狀態ヲ觀察

第二章 胃液採取1方法

(飯二椀牛肉三十匁魚少量ヲ混セル雑炊)及ビ牛乳一合ヲ以テ飼養シ試験ニ供シタル犬ハー定所ニ繋ギ、毎日正午試驗後一定量ノ食餌

一心理狀態ニアランコトヲノゾミ可及的同一人ガ同一方法ヲ以テ同ラシメタリ。且試驗前毎朝放尿排便ノ習慣ヲッケ試驗中ハ可及的同夕景若シモ食ヒ殘シアレバ必ズ取り上ゲテ翌朝全ク空腹ノ狀態ニア

ル全ク空腹ナル犬ヲ翌朝固定臺上ニ固定帶ヲ以ラ固定シタル後小胃而シテ胃液採取ノ方法ハ前日畫一定食餌ヲ與ヘタル後何等與ヘサ

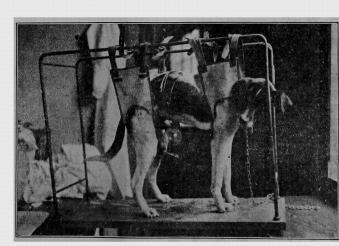
室内ノ同一箇所ニテ試験ヲ行へリ。

リ分泌シ來ル胃液ヲ毎十分間共ニ採取シテ以テ曲線ヲ作レリ。

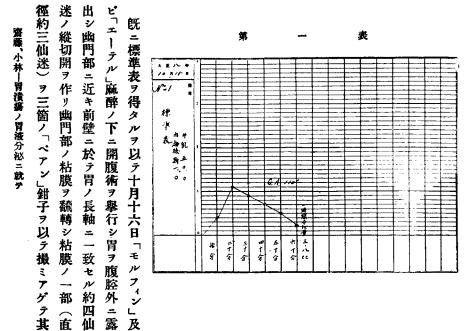
瘻管中ニ分泌液受器ヲ挿入シソノ後一定試食ヲ投與シ此際小胃中ヨ

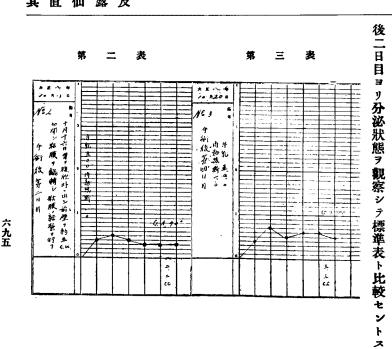
平 第一試驗

ス」一瓦)二對スル小胃ノ分泌平均量ヲ觀察セリ。 大正八年八月三十日バウローフ氏小胃手術ヲウケタルA犬ヲ今年九月十五日ヨリ連日一定試食(牛乳五○兎肉「エ



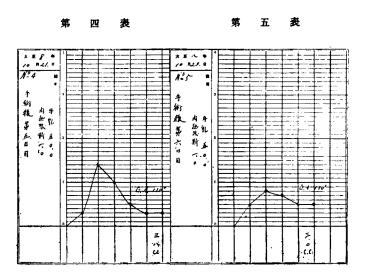
十月十五日1分泌量ハ連日1分泌ニ對シテ代表的1モノト見做シ得ル故ニ之ヲ以テ標準表トナシ次ニ掲グの

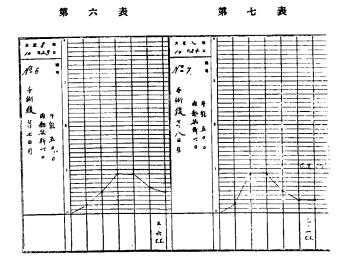




潰瘍ノ形成センコトヲ望メリの飜轉セシ粘膜ヲ整腹シ胃基底部ヲ太キ結紮絲ニテ堅ク結紮シ粘膜ノ壊疽脱落シテ

壁及じ腹壁ヲ層々ニ縫合シテ術ヲ終ヘタリ。經過良好。術





標準度ニー致セリロ

齋藤、小林―胃潰瘍ノ胃液分泌ニ眈テ

加答兒ノ加ハリテ最早使用ニ堪へザルニ至レリ。

第二試

睑

第九日目ョリハ分泌胃液混溷シ粘液ヲ混シ小胃粘膜

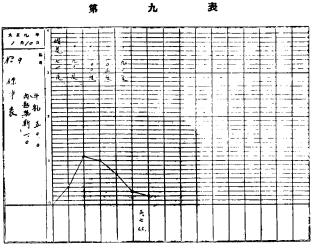
八 表

ヲ見レトモ其後漸次恢復シ術後第五日目(第四表) リテハ分泌大ニ亢進シテ酸度ノ如キモ標準度ヲ超過シ其 時間ノ分泌總量ニ於テハ標準量ト一致セルヲ見ルモ第 以上ノ成績ヲ通覽スルニ手術後ハ分泌大ニ侵サレ居ル 三至 ヲ置キテ數囘手術ヲ企テ幽門部粘膜ヲ結紮若シクハ切除 時間ノ分泌總量ヲ測定シテ標準表ヲ定メ後チ一定ノ間歇 準表ト比較セリロ シテ潰瘍ヲ作成シ後チ直チニ分泌狀態ヲ觀察シテ之ヲ標 試食(牛乳五○瓦肉「エキス」一瓦)ニ對スル健康小胃ノ各 十分間ノ分泌量各十分間ニ採取セル胃液中ノ酸度及ビー 從テパウローフ氏小胃手術ヲ施シ恢復ヲ待チテ連日一定 健康ニシラ柔順ナル中等大1B犬(牡)ヲ選ビ先ヅ式ニ

減量ヲ見僅カニ標準量ヲ下レリト雖モ酸度ニ於ラハ殆ド ニ於テハ常ニ標準狀態ト異リテー時間ヲ經過スルモ分泌 ハ決シテ靜止ノ時期ニ近ヅカズシテ猶ホ持續アルヲ示セ 二ノ十分間ノ分泌量ハ標準量ヲ超過セリ。且術後ノ分泌 第六日目七日目及ビ八日目ノ分泌ハ前日ヨリハ多少ノ 泌量及じ酸度數ハ最モ平均數二近キヲ以テ之ヲ標準表ト 胃液ヲ採取シ各部ニ就テ酸度ヲ測定セリ。一月十日ノ分 「エキス」一瓦)ヲ與ヘテ小胃ヨリ分泌シ來ル各十分間ノ ヲ行フ。經過好良⁰ 大正九年一月七日ョリー定試食(牛乳五○立方仙迷肉 大正八年十二月二十二日B犬ニパウローフ氏小胃手術

六九七

見做シ左ニ掲グの



っ。 平行スル約 テ右肋弓ョ 胃ノ腸口部 囘ノ潰瘍作 リ正中線 ニ 迷右方ニ於 成手術ヲ行 十四日B犬 ョリ約二仙 ニ就テ第一 即チ小

> 終レ ý

過好良。

翌十五日 ヨリ直チ 二胃液ヲ

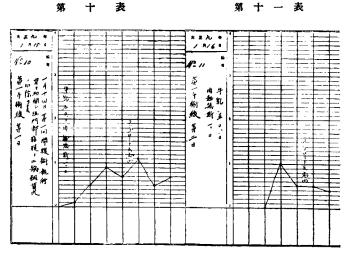
ヲ以テ一月 表ヲ得タル

表

+

旣ニ標準

除シ 膜ヲ飜轉シ此部ノ後壁粘膜ヨリ約二錢銅貨大ノ粘膜ヲ切 手術的ニ胃潰瘍ヲ作リ胃壁及ピ腹壁ヲ縫合シヲ術ヲ 術後生理的食鹽水二○○瓦ヲ皮下ニ注入ス。經



リ 0 態ヲ窺へ 其分泌狀 採取シテ

縦切開ヲ作リテ開腹ス。

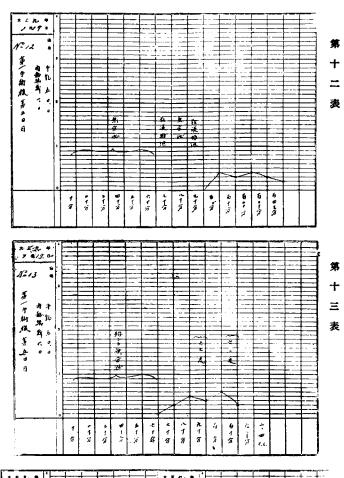
腹膜ハ多少交互ニ癒著シ胃表面

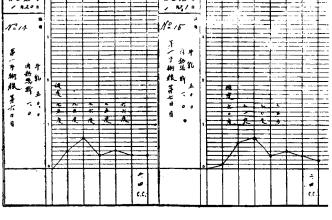
一二仙迷ノ

表

軸ニ沿ヒラ約四仙迷ノ切開ヲ作リラ胃ヲ開キ幽門部ノ粘 炎症ヲ想像セシム。胃ヲ露出シ幽門部ノ外表ヨリ胃ノ長 二於ラモ周圍炎ノ經過シタリシ痕跡ヲ示シ小胃手術後

六九八





第

+

Ŧī.

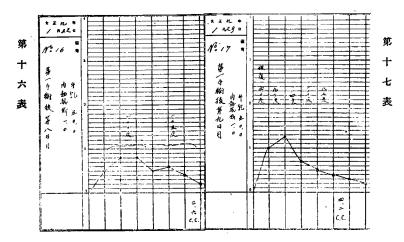
表

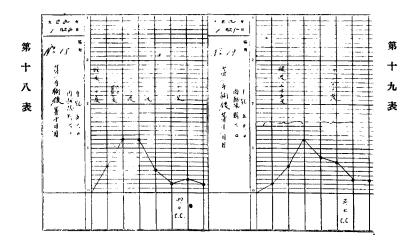
六九九

第

+

四 表





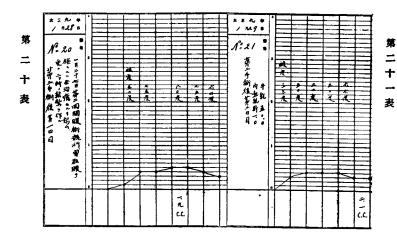
齋藤、小林―胃潰瘍ノ胃液分泌ニ・歳テ

去り透明ナル胃液ヲ分泌シ來レドモ其分泌量及ビ其酸度 十二表)。 泄シ百分後ヨリ透明ナル胃液ノ分泌シ來ルヲ見タリ(第 四十分間ニ分泌シ來ルモノハ混溷シ且多少ノ粘液ヲ混セ ハ標準數ニ達セズの ノナランカロ り。鹽酸反應ハ陽性ナレトモ甚ダ微弱ナリ°..之レ恐ラク タルニ酸度ノ低キ少量ノ分泌アリキ(第十三表)o モ粘液ヲ混ゼリ。鹽酸反應ハ陽性ナリキ。 手術ニ因スル胃粘膜及ビ腹膜ノ炎症反應ニ原因スルモ 第九口及ビ第十日目ハ分巛 シク亢進シ其著量ニ於テ其 第八日目ハ分泌狀態殆ド標単數ニ一致セリロ 術後第六日及ビ第七日目ニ至ルトキハ反應炎症ハ旣ニ 第五日ハ試食投與後六十分間無分泌、更ニ試食ヲ投與 第二日ハ試食投與後二十分間ハ分泌セズ其後分泌アリ 第三日ハ試食後一時間ハ殆ド分泌ヲ見ズシテ粘液ヲ排 二○○瓦ヲ皮下ニ注入シテ術ヲ終レリ。 多少ノ浸潤ヲ呈セリ。 察セリロ 徑約二・五仙迷)ヲ太キ結紮絲ヲ以テ堅ク結紮シ壞疽費瘍 除セル粘膜飲損部ハ全ク治癒シ該部及ビ胃壁ノ縫合部ハ 膜交互ノ癒著ハ存在スレドモ胃ヲ腹腔外ニ露出スルニ難 ョリ固定臺ニ固定シ試食ヲ與へ式ノ如クニ分泌狀態ヲ觀 ムコロヂウム」ヲ創面ニ貼用シ繃帶ヲ施シ生理的食鹽水 ノ成立ヲノゾメリ の後チ胃壁及ど腹壁ヲ閉ヂ沃度「フ*ル カラスの胃壁ヲ切開シ粘膜ヲ飜轉シテ檢査スルニ襲ニ切 二内部粘膜ノ狀態ヲ觀察センカ爲メニ開腹術ヲ行フ。 更ニ幽門後壁粘膜ニ於ラ相竝ベル二箇所(各一箇ノ直 第十二日目(一月二十六日)不明。 第十一日目ハ分泌狀態復タ標準數ニ近シ。 一月二十七日第二囘手術ヲ施行ス。 即チ術後十三日目 經過好良。翌日

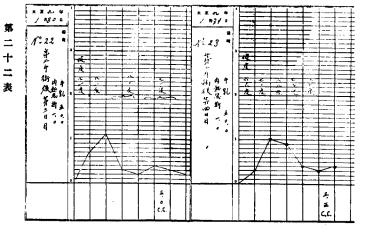
第一囘手術後第一日ハ多少ノ分泌アリシト雖モ初メノ

酸度二於テ遙カニ標準數ヲ超越セリロ

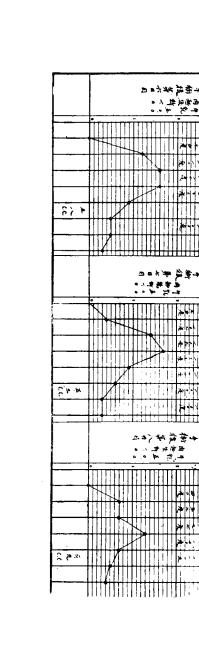
腹



第二十三表



せのニ



¥ . . .

* * *

11

B

ł١

五表

11 + 11

裘

溷スルコトナク始メヨリ透明ニシテ術後第一日及ピ第二 應炎症ハ前囘ノ如ク强度ナラサルガ如シ。其分泌量ハ著 シク障碍セラレ居レドモ分泌シ來ル胃液ハ前囘ノ如ク混 一月二十七日ノ第二囘手術後ニ於テハ手術ニ因スル反 | 日ノ表(第二十表及ピ第二十一表)ニ明カナルガ如ク酸度 ニ達シ酸度ノ如キモ六六度―七〇度ヨリ最高八八度ニ達 ノ如キモ五〇―六〇度ヨリ最高八〇度ヲ示セリo 術後第三日及ビ第四日ニ至リラハ分泌量ハ殆ド標準數

古〇三

12 Ł ッ

齋藤、小林―胃潰瘍ノ胃液分泌ニ眈テ

示セル所アリロ

モ亦著シク上リテ標準度ヲ超過シ | 二〇度—一三三度ヲ 方仙迷ニ對シラ多キハ五・八立方仙迷ヲ示シ酸度ノ如キ テ分泌ハ著シク亢進シ分泌量ハ 一時間ノ標準量三・七立

シテ粘膜ノ狀況ヲ觀察セリ。然ルニ一月二十七日ニ結紮

二月五日(術後第九日目)ニ更ニ第三囘ノ開腹術ヲ施行

セシニ箇所ノ粘膜部ハ多少充血蓍シク浸潤硬結ヲ呈シ此

スルヤ或ハ旣ニ治癒セルヤヲ知ランカタメニ

此分泌ノ亢進セル狀態ニ於ラ胃粘膜ノ潰瘍ハ猶ホ存在

決シテ靜止ノ狀態ニ至ルコトナクシテ猶ホ○・五立方仙

ニョレル敏襞ニヨリテ潰瘍ノ大部分ハ被蓋セラルヽ!狀 澤出血シャスシ縁ハ鋭利ニ粘膜ト境スレドモ粘膜ノ卷入 ノ潰瘍ノ存在スルヲ認メタリの潰瘍底ハ帶黑色ニシテ滑 部ニ結紮ニ相當シテニ箇ノ大ナル直徑約二仙迷ノ類圓形

ニアリキ。潰瘍附近ノ粘膜ニ多少ノ發赤ヲ認メシモ他部

時間後ハ分泌殆ド全ク静止スルガ如キ狀態ニ達スレド

| 術ノ潰瘍狀態ニ於テハ試食ニ對シー時間後ニ至ルモ

旣ニ記載セル如ク標準狀態ニアリテハ一定試食ニ對シ

迷ノ分泌狀態ヲ見ルコト稀ナラズシテ(第二十四表"第二

十六表)七十分八十分ニ至ルモ獪ホ○•三立方仙迷ノ分泌

ノ粘膜ハ全ク健全ナリキの

斯ク所期ノ潰瘍ノ存在ヲ認メシカ故

其儘 ニシ ラ別

分泌減退ノマ、假令○•三─○•四立方仙迷位ノ分泌狀態 **來セル時ニ於ラノミナラズ分泌ノ減退セル時期ニ於ラモ**

液ヲ採取シテ分泌狀態ヲ觀察セリロ

手術ヲ加フルコトナク胃壁及腹壁ヲ閉デ翌日ヨリ更ニ胃

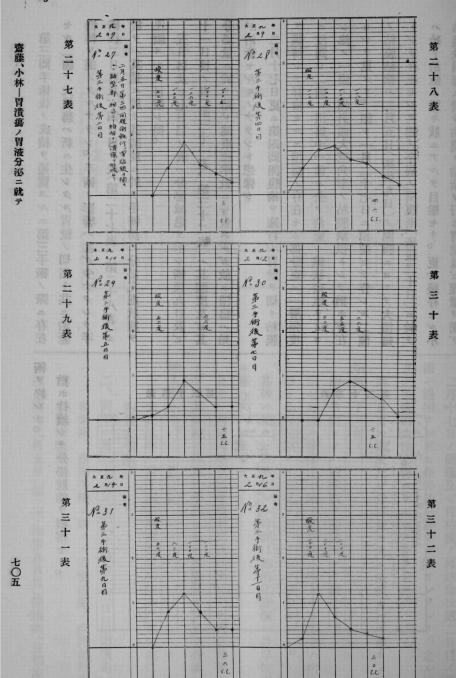
長ク維持スルヲ見ル。(第二十表及ピ第二十一表)。之 恐ラク胃粘膜ノ過敏ニシテ興奮狀態ノ長ク持續スルニ

狀態ヲ維持スル場合スラ之アリロ

此關係ハ分泌ノ亢進ヲ

術後第六日、第七日及ビ第八日ノ觀察ハド殆同樣ニシ

因スルモノナランカロ



齋藤、小林―胃潰瘍ノ胃液分泌ニ就テ

第三囘手術後ノ成績ヲ通覽スルニ第三手術ノ際ニ存在

術ヲ終レリの

猶ホ持續シテ**分**泌狀態ヲ觀察セリo

セル二箇ノ大潰瘍ハ新ニ生シタル胃壁ノ切創ト共ニ治癒

術後二日目及ピ四日目ノ表(第二十七表、第二十八表)ニ 機轉ヲ進メタルナラン。手術ノ影響ハ甚ダ少ナクシテ手

連續スルヲ目撃シ得の 於テハ其量ニ於テ其酸度ニ於テ手術前ノ分泌亢進狀態ヲ

十一日目ノ表(第三十一表、第三十二表)ハ其酸度及ビ其 五日目及ビ七日目ノ表ハ分泌減退ヲ示シ術後九日及ビ

分泌量ニ於ラ殆ド健康標準數ニ一致スルガ故ニ潰瘍ハ殆

ド治癒セルモノナラント想像シ

ヲ飜轉シテ詳檢セルニ潰瘍ノ存在セシ部分更ニ一層强度 ニ浸潤シ二箇ノ潰瘍中一箇ハ全ク治癒シ線狀瘢痕ヲノコ 二月十七日更ニ第四囘開腹術ヲ施行シ胃壁ヲ切リ粘膜

セシヲ見タリ゜卽チ一月二十七日ニ相竝ピテ作レル二箇 ノ粘膜結紮ハ二月五日(術後九日)ノ開腹ニョリテ大潰瘍

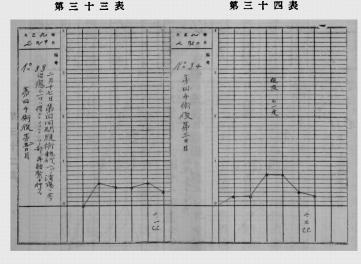
シ他ノ一箇ハ帽針頭大三角形ノ粘膜缺損トシテ猶ホ存在

粘膜缺損部ニ於テ粘膜ノ結紮ヲ行ヒ胃壁及ビ腹壁ヲ閉ヂ

ハ殆ド治癒ニ近キ狀ニアルヲ目撃セリ。更ニ殘存セル小

トシテ存在セシヲ認メ今囘ノ開腹術(術後二十日)ニ於ラ

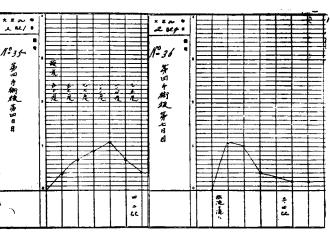
第三十四表



七〇六



第三十六表



男ウケ**其後左**ノ四囘ノ手術ニ堪へ柔順ニシテョク**分泌試**男ウケ**其後**二人年十二月二十二日パウローフ氏小胃手術工堪へザルニ至レリ。 第七日目ハ分泌量ハ殆ド標準數ニ等シキモ多少ノ粘液 第四日目ニテハ標準數ヲ超過セルノ観アリ。 ラク手術的炎性影響ニョルモノナランカロ

第三日目ハ酸度及ビ分泌量モ大ニ恢復セルモ遙カニ標

準數ノ下ニ在りの

液ハ透明ナレドモ分泌量ハ著シク侵サレヲレリ。之レ恐

二月十七日ノ開腹及ビ胃粘膜ノ再結紮後第二日目ノ胃

卸貨大切除。 一、大正九年一月十四日開腹術胃切開幽門部粘膜二銭驗ニ從へり。

三、同年二月五日(第二手術後九日目)開腹術、胃切開、二箇所結紮。 二箇所結紮。 四年一月二十七日(第一手術後十三日目)開腹術、二、同年一月二十七日(第一手術後十三日目)開腹術、

せつせ

即チ十七日ヨリ二十八日ニ至ル連日分泌試験ヲ擧行シ

齋藤、小林―胃濱瘍ノ胃液分泌ニ眈テ

胃粘膜:潰瘍二 存在證明。

四 同年二月十七日(第三手術後十二日目)開腹術、胃

切開、前記二箇ノ潰瘍中一ツハ全治、一ツハ僅カ 存在。更ニ再結紮。

證明セラレタル所ナリ。此場合ニ於テモ第一手術ノ際ニ 慢性胃潰瘍ヲ作ルコトノ困難ナル從來動物試驗ニ於テ

二錢銅貨大ノ粘膜切除創い其後十三日目ニ企ララレタル

テ企ララレタル二箇ノ相竝ピラ作ラレタル粘膜結紮ハ其 第二手術ニヨリラ全治セルヲ證明セシヲ以テ見レバ治癒 ノ旣ニ其以前ニ達セラレシヲ想像セシム。第二手術ニ於

後九日目ニ執行セラレタル第三手術ノ際ニハ旣ニ潰瘍ノ 形成シアリシヲ目撃シ第四手術(二月十七日第二手術後

方仙迷ニ達シ酸度ハ七十六度ヲ示セリ。

二十一日目)ニテハ一箇ハ治癒シ一箇ハ僅カニ存在セシ ヲ認メタリ。二箇ノ相竝ベル潰瘍ハ一箇ヨリハ治癒シカ タルカ故ニ治癒ヲ遷延セシメシヲ想像セサルベカラズロ タク且此場合ハ第三手術ニヨリテ治癒機轉ヲ攪亂セラレ 大正九年六月八日。健康ナル中等大ノ牝犬Cヲ選ミ式 第三試 驗

第三十八表、第三十九表、第四十表)ヲ選ミ此四表ヲ平均 而シテ此十二日間ニ於ケル代表的ノ表四(第三十七表) セリロ

分間ノ分泌量ヲ計リ各部ニ就テ比較的綿密ニ酸度ヲ測定 試食トシラ牛乳五〇瓦リービヒ肉越幾斯一瓦ヲ與へ各十

○・七立方仙迷ヲ分泌シ酸度ハ最モ低ク五十八度ヲ示 シラ第四十一表ノ標準表ヲ得タリロ 第二ノ十分間ニ於ケル分泌量ハ最モ多クシテー・八立 本表ヲ觀察スルニ最初ノ十分間ノ分泌ハー瓦以内即

y

之ョリ毎十分間ノ分泌量ヲ減ジ第三ノ十分間ニー・一

五立方仙迷第四ノ十分間〇・六五立方仙迷ナリ。

高クシテ九十度乃至九十一度ヲ示セリ。第五ノ十分間ノ 分泌量ハ○•四五立方仙迷第六ノ十分間ノ分泌量ハ○•二 而シテ此第三及第四ノ部分ニ分泌スル胃液ハ酸度

立方仙迷ニシテ酸度ハ七十九度及ビ七十七度ヲ示セリロ 而シテ一時間ニ於ケル分泌總量ハ平均五・○立方仙迷

ナリロ

日ニ至リテ使用シ得ルニ至レリの

從テパウローフ氏小胃手術ヲ施行ス。經過良好。十七

齋藤、小林――胃潰瘍ノ胃液分泌ニ就テ

七〇九

十九日C犬ニ就ヶ第一囘ノ開腹術ヲ 旣ニ標準線ヲ得タルヲ以テ六月ニ

第

四

+ Ξ 表

行ヒ胃幽門部ノ前壁ニ於テ胃ノ長軸

「ベアン」鉗子ヲ以テ撮ミ擧ゲ其基底 於テ直徑約三仙迷ノ粘膜部ヲ三箇ノ 此部ヨリ幽門部粘膜ヲ飜轉シ後壁ニ ニー致スル約四仙迷ノ縦切開ヲ作リ

ヲ太キ結紮絲ヲ以テカタク結紮シ更

ニ潰瘍ノ生成ヲ確實ニシ且長時間ノ

成立ヲ希望シカッチエンスタイン氏 組織中ニ十分ノー定規鹽酸液ノ一五 ノ方法ニ從ヒ結紮部ノ周圍ノ粘膜下

立方仙迷ヲ注射シ後胃壁及ビ腹壁ヲ ○立方仙迷ノ生理的食鹽水ヲ皮下ニ ロデュウム」ヲ貼シ繃帶ヲ施シテ二〇 閉ヂ腹壁ノ縫合線ニ沃度「フォルムコ

而シテ翌三十日ヨリ胃液ヲ採取シ 第 四十二表

注入シテ術ヲ終レリ^o

テ分泌ノ狀態ヲ觀察セリロ

地域で、まのお版下、沙州では極端、よのは私版下、沙州で、上のは 六月二十九日第二回明股鄉執行此四部 第一年新被第二日日 بر * درو ۔ و د د

-. c.c.

第一年新後 第四日目

+ ħ 表

29

1

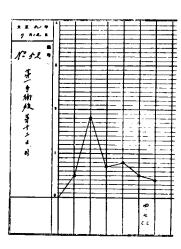
四 + 四 表

第一年納後 养二日

第

齊藤、小林-胃濱邁ノ胃液分泌ニ就テ

t --



六・七立方仙迷乃至七立方仙迷ニ達シ酸度ノ如キモ第八失シ分泌量ハ著シク標準量ヲ超過シテ一時間ノ分泌總量

日目ノ胃液ニアリテハ標準酸度ヲ超過セリロ

第九日以後ハ其分泌量ニ於テ其酸度ニ於テ僅カニ

數ニ劣レリロ

第五十二表

六月二十九日ノ第一囘手術後ニ觀察シタル成績ヲ通覽

粘膜ヲ檢スルニ結紮部ニ相當シテ多少ノ浸潤アリ。此部開腹術ヲ行ヒ胃ヲ露出シテ幽門部前壁ニ縱切開ヲ作リ胃ヲ施行セリ。卽チ「モルヒネ」注射「エーテル」麻酔ノ下ニヲル月十三日第一囘手術後第十四日目ニ第二囘ノ開腹術

迷ヲ注射シ胃壁及ビ腹壁ヲ閉ヂラ術ヲ終レリoチ其周圍ノ粘膜下組織ニ十分ノ一定規鹽酸液一五立方仙

ノ癥痕組織中ニ殆ド針尖大ノ實質缺損ヲ認メ得タリロ

卽

術後第四日ヨリ第六日マデハ炎性反應ハ未ダ全ク去ラ シテ二十一日ニ至レリロ

術後第一日卽チ七月十四日ヨリ直チニ分泌狀態ヲ觀察

ザルモ分泌ハ多少恢復シ來ルガ如シ。然レドモ其量ハ標

ノミ

ド全ク分泌ヲ見ズシテ只少量ノ粘液性液體ヲ排泄シ來ルスルニ術後第一日ヨリ第三日マデハ反應炎症ノタメニ殆

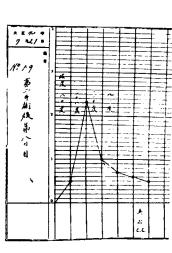
七二二

準數1年量ニシテ酸度1如キモ甚シク**下位**ニアリo

術後第七日乃至第八日ニ至ルトキハ炎性反應ハ殆ド消

齋藤、小林―胃潰瘍ノ胃液分泌ニ就テ

七二三



Ł + 九

第

表

アリ。卽チ一時間三・一立方仙迷ノ胃液ヲ分泌セリ。而シ 手術ノ反應ハ極メテ少ナク翌十四日ヨリ中等量ノ分泌

> シカシー般ニ甚シク類似セリ。 第六日及ビ第八日ノ分泌狀況ハ其酸度ニ於テ其分泌量

二於テ邁カニ標準數ヲ超過セリ。

(第五十七表、第五十

九表)。

ャ否ャヲ知ラント欲シテ七月二十二日更ニ第三囘ノ開腹 此分泌亢進狀態ニ於テ胃粘膜ニ果シテ潰瘍ノ存在スル 試驗動物ノ精神狀態ニ原因スペキカ(第五十八表)。

亢進狀態間ニ嵌入セルハ頗ル奇ナリ。或ハ其日ニ於ケル

第七日目ハ標準敷以下ニシテ第六日及ビ第八日ノ分泌

五仙迷幅徑一•五仙迷ノ潰瘍存在ヲ認メタリ。

術ヲ施行シ胃ヲ切開シテ幽門部粘膜ヲ檢スルニ長徑二・

ナリ。卽チ潰瘍周圍ニ十分ノ一定規鹽酸液一○立方仙迷 而シテ潰瘍部ノ記載ハB犬ノ條下ニ記セルモノト同

ヲ粘膜下ニ注射シ胃壁及ビ腹壁ヲ縫合シ、生理的食鹽水

│二○○立方仙迷ヲ皮下ニ注入シテ術ヲ終レリ。

一月七日ニ及べりの 手術ノ翌日卽チ七月二十三日ヨリ胃ノ分泌ヲ試驗シ八

第三日及ビ第四日ノ狀況ハ多少標準數ニ劣レルガ如シ

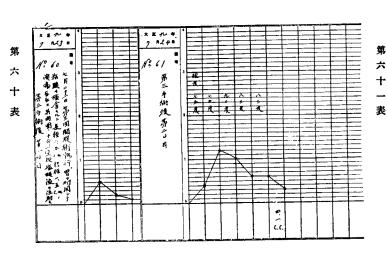
標準數ニ等シロ

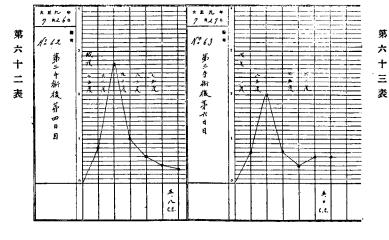
第二日ノ胃液ハ其酸度ニ於テ其分泌量ニ於テ殆ド全ク

三表)。

テ此胃液ハ始メヨリ透明ニシテ粘液ノ混在ナシ **(第五十**)

齊蘇、小林一胃潰瘍ノ胃液分泌ニ就テ





齊藤、小林一胃潰瘍ノ胃液分泌ニ就テ

第六十五

表

第

六十四

表

第六十六

表

第一十分以 第十三日日

e K CC

<u>۽</u> ج 七一六



六 + 九 麦

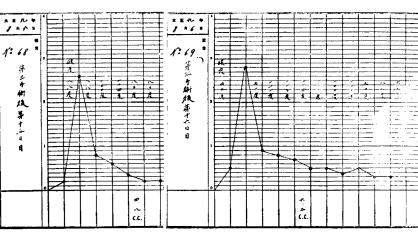
泌量ニ於テ標準量ヲ超過セリロ

モ相當ノ分泌アルヲ見ル(第六十一表)。

術後第二日(七月二十四日)ハ多少標準數ニ劣レリト雖

手術ノ翌日殆ド全ク分泌ヲ見ズ(第六十表)。

第四日目ノ分泌ハ酸度ハ殆ド標準敷ニ一致スレドモ分



術後八日目ヨリ十一日目マデハ不得已事故ノタメニ 觀

モ六日目ノ酸度ハ標準敷ヨリ低ク七日目ノ酸度ハ標準敷

第六日及ビ第七日目ハ分泌量ハ共ニ標準量ニー致セル

コリ高シロ

察スルヲ得ザリキロ

術後第十二日目(第六十五表)ハ分泌著シク亢進シ其一

セルヲ見タリロ

時間ノ分泌總量ニ於テ其酸度ニ於テ遙カニ標準數ヲ超過

リ(恐ラク水ヲ飮ミシナランカ)約三十分間固定臺上ニ固 八月三日(術後十三日)第六十六表ハ試驗前旣ニ分泌ア

定セルマ、放置シ分泌止ミシヲ目撃セル後一定試食ヲ投

與セシニ分泌量及ビ酸度ノ著シク低キヲ見タリ。之レ恐

ラク生活狀態ノ異常ト試驗動物ノ精神狀態ノ異常ニ キモノナランの 歸ス

第十四日目ヨリ第十六日目迄ハ分泌ノ若シク亢進ヲ示

シー時間ノ分泌量六・二立方仙迷ニ達シ酸度ノ如キモ最

高一二〇度ヲ示セル所アリロ 此分泌亢進狀態ニ際シ胃粘膜ノ狀況ヲ窺ハント欲シテ

八月七日更ニ第四囘ノ開腹術ヲ施行シタリ。腹膜面ハ

多

部ヲ開キヲ粘膜ヲ檢スルニ前囘ニ存在セシ潰瘍ハ治癒ニ 少癒著シ中等度ノ充血ヲ認メタリ。胃ヲ牽引露出シ幽門

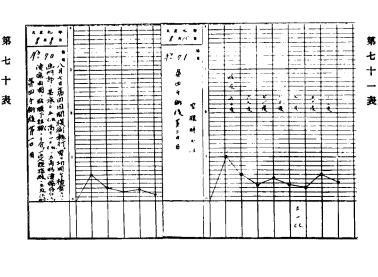
傾ケルモ獪ホ基底○・五仙迷高サー仙迷ノ三角形ノ潰瘍 粘膜ニ充血ヲ認メシモ少シク離レタル部分ニアリテハ全 ク健全ナル粘膜ノ觀ヲ呈セリロ 潰瘍部ハ著シク浸潤シ潰瘍周圍 潰瘍邊縁ニ於テ各方面

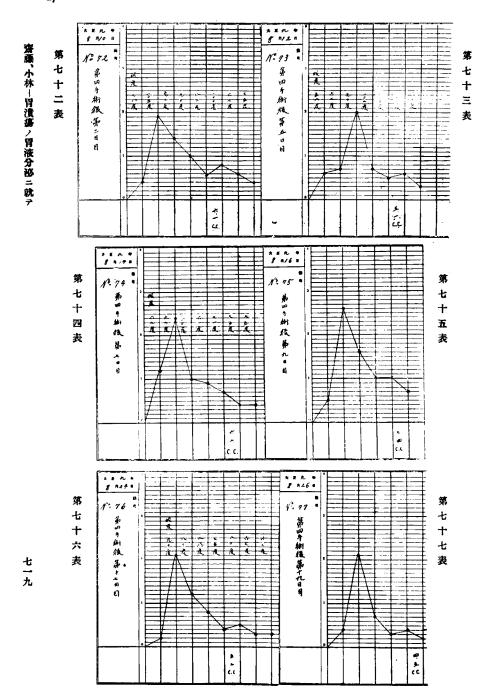
ノ殘存セルヲ見タリo

向ァ十分ノー定規鹽酸液ノ一五立方仙迷ヲ粘膜下ニ注射 後チ胃壁及ビ腹壁ヲ閉ヂテ術ヲ終レリロ

シ更ニ潰瘍ノ成立ヲ望メリロ

翌日ヨリ其分泌狀態ヲ觀察セリロ





七二〇

液一〇立方仙迷ヲ注射シテ術ヲ終レリロ

後チ叉分泌狀態ヲ觀察セリロ

七十表)。 術後三日五日七日及ビ九日ノ表ハ著シク標準數ヲ超過 第四囘手術ノ翌日ハ甚ダ僅少ノ分泌アルノミナリ(第

第七十四表、第七十五表)。

シ分泌ノ亢進狀態ヲ現ハセリ(第七十二表、第七十三表、

第七十七表)八月二十八日更ニ第五囘ノ開腹術ヲ擧行ス。 此狀態ニ於テ粘膜ノ狀況ヲ觀察セント欲シ(第七十六表) 二十四日及ビ二十六日ノ分泌狀態ハ殆ド標準數ニ近シ 其後一週間ハ無已事情ニテ觀察スルヲ得ザリキロ

痕ヲ認メタルノミニシテ旣ニ潰瘍ノ治癒シアルヲ認メタ 潤硬結シ胡桃大ノ腫瘍トシテ觸知セシメ粘膜面ニハ只搬 **叉粘膜・充血ヲ見ズ。今若シ浸潤硬結ヲ呈セル部ニ** 缺

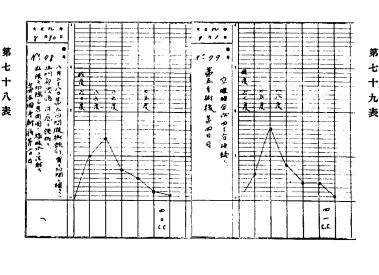
テ檢スルニ嘗テ潰瘍ノ存在セシ粘膜下組織ハ甚ダシク浸

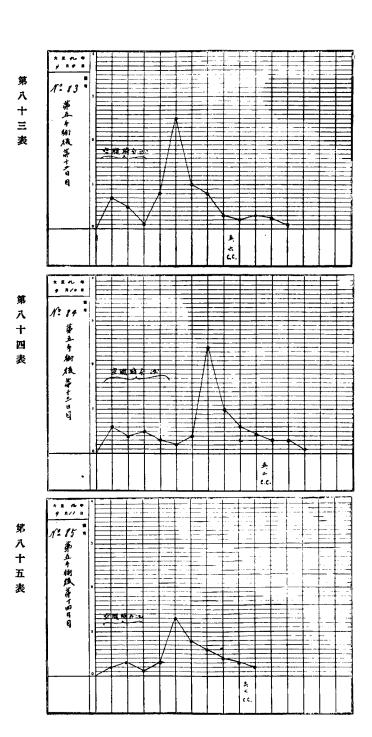
多少ノ腹膜癒著ヲ剝離シ胃ヲ牽引露出シ幽門部ヲ開

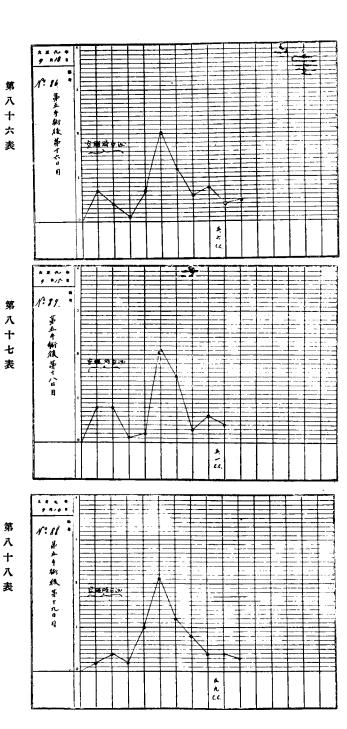
" o

損部ヲ作ラバ血管ノ關係上治癒機轉ノ遅延スベキハ明ナ

ヲ行ヒ其周圍ノ粘膜下組織ニハ同ジク十分ノ一鹽酸定規 之ヲ以ヲ此部ニ於ヲ直徑約四仙迷大ノ圓形ノ粘膜切除







齊廳、小林―胃濱獅ノ胃液分泌ニ就テ

32 第五囘ノ手術後二日ニ觀察シタル所ノモノハ第七十八

表ナリ。此狀態ニ於テハ最初ノ十分間ノ胃液中多少〃粘

酸度ニ於ラモ未ダ標準數ニ達セズ(第七十九表/第八十表

試食投與後ハ中等度ノ分泌ヲ見レドモ其量ニ於テモ

其

及ビ第八十一表)。

液ヲ混ジ其酸度及ピ分泌量共ニ未ダ標準數ニ達セズの

十日第七十一表ニ觀察セルガ如ク空腹時ニ於ラ旣ニ分泌

ノ存在スルニ注目セリ。殊ニ八月十日ノ表ノ如ハキ最高 一立方仙迷(十分間)最低○•四立方仙迷(十分間)ノ分泌

四表)ニ及ペリの

七度ヲ示セリの

立方仙迷ノ分泌持續ヲ示シ酸度ノ如キモ五十度乃至六十

胃壁及ど腹壁ヲ閉ヂラ術ヲ終レリロ

術後持續シテ分泌ヲ觀察セリロ

即チ更ニ潰瘍周圍ノ粘膜ヲ切除シー大潰瘍ヲ作成シテ

デノ分泌狀態ハ空腹時ニ於ラ各十分間ハ○•四−○•八

九月一日(術後第四日目)ヨリ九月六日(術後第九日目)

ルヲ認メ得タリo

別ニ觀察セリロ

定時間ノ分泌狀態及ど試食ヲ與ヘテ後ノ分泌狀態ヲ各

外ニ露出シ幽門部ヲ切開シラ粘膜ヲ檢スルニ此部ハ硬固

九月十七日第六囘ノ開腹術ヲ施行シ胃ヲ牽引シテ腹腔 セル所多シ。此際酸度ヲ測定シ得ザルヲ遺憾トスo

ナルー大浸潤ヲ呈シ直徑約三仙迷ノ定型的潰瘍ノ存在ス

之ヲ以テ以後ノ觀察ハ試食ヲ與ヘザル空腹時ニ於ケル

ノタエズ存在スルヲ示セリロ

過

朝試驗時ニハ全ク空腹ナルガ故ニ分泌ハ全ク靜止ノ狀態

タル後犬小含ニ繋ガレテ何物ヲモ攝取セズの之ヲ以テ翌

試験犬ハ前日正午飯及ビ肉魚等ヲ以テ十分飼養セラレ

ニアルベキ筈ナリ。然ルニ八月三日第六十六表及ピ八月

分泌量ハ三・四立方仙迷ニ達セリ。而シテ此分泌亢進狀

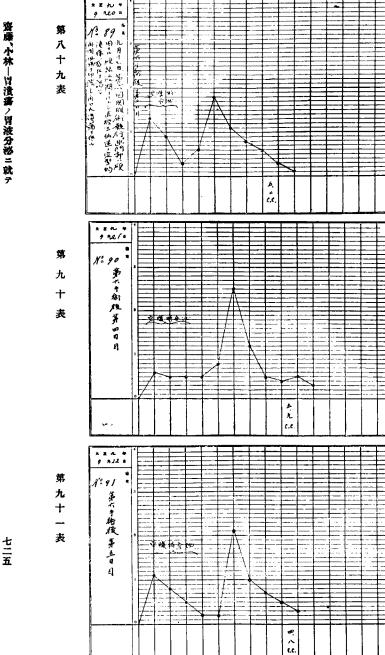
分泌ニ在リテハ其量著シク増加シ第二ノ十分間ニ於ケル

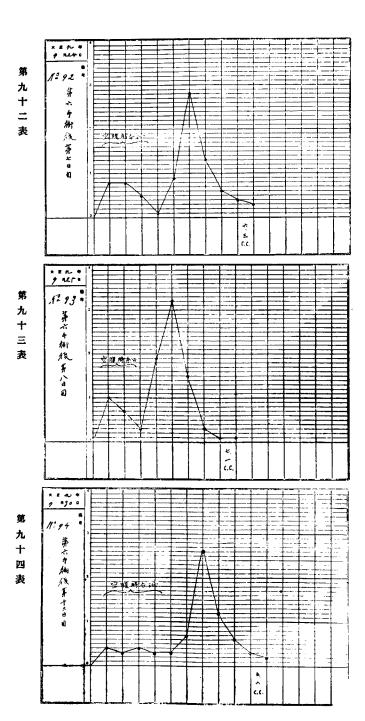
ハ頓ニ著シク亢進シ空腹時ニ於テモ殊ニ又試食投與後ノ

九月八日(術後第十一日目)第八十二表ニ至リテハ分泌

態ハ九月十日 (術後第十三日目) (第八十三表及ビ第八十

以後ハ分泌多少減セルガ如キモ其量ニ於テ標準數ヲ超





```
分泌ニ少シク標準數ニ及パザルヲ見ルノミ。
                                                                                                                                                                                                                                                                                    四箇月間最モ柔順ニ試験ニ從ヘリ。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 其後六囘ノ手術ニ堪へ最後ノ觀察ハ九月三十日ニ及ピ約
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      ガ如シト雖モ試食後ノ分泌ハ標準敷ニ及パズロ
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   九表ニ示スガ如シ。即チ空腹時ニ於ケル分泌比較的多キ
                                                                                                                                            =
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           C 犬ハ大正九年六月九日小胃手術ヲ行ヒシモノニシテ
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   今囘ノ試驗ニ於ラモ酸度ヲ檢定スルヲ得ザリシヲ遺憾
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           術後四日以後ハ分泌著シク亢進セルヲ見只第五日目ノ
                                                                                                                                                                                                                                                        今其手術ヲ摘錄スルトキハ左ノ如シ○
                                                                                                                                                                                                                            。大正九年六月二十九日開腹、胃切開、幽門部後壁
齋藤。小林−----|| 潰瘍ノ胃液分泌ニ就テ
                                                    同年同月二十三日(第二手術後第九日目)開腹術、
                                                                                                                                          同年七月十三日(第一手術後十四日目)開腹、胃切
                                                                                                             開、結紮部ニ相當シテ潰瘍ノ痕跡證明。周圍粘膜
                          胃切開、幽門部ニ長徑二・五仙迷幅徑一・五仙迷ノ
                                                                                 二十分ノ一鹽酸定規液注入。
                                                                                                                                                                                                ニ於ラ直徑約三仙迷ノ粘膜ヲ結紮シ其周圍ニ十分
                                                                                                                                                                     一鹽酸定規液泩入。
                                                                                                                                                                                                五ノ著明ナル事實ニ遭遇ス。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   四。
                                                                                                                                          以テ手術的ニ潰瘍ヲ生成セシムル時ハ術後三―五日間
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           な
                          試驗第一囘手術後及ビ第三試驗第一囘手術後)。
                                                    答兒的影響ヲ蒙リ粘液ノ排泄シ來ルヲ見ル(例合第二
                                                                                 キ影響ヲウケテ殆ド無分泌ヲ呈シ小胃粘膜モ亦多少加
                                                                                                                                                                                                                             第一試験、第二試験及ビ第三試験成績ヲ通覺スルニ四
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              五。同年同月二十八日(第四手術後二十一日目)開腹
                                                                                                             手術ニ因スル胃壁及ビ腹膜ノ炎性反應ノタメニ著シ
                                                                                                                                                                    一、幽門部後壁ノ粘膜ヲ切除若シクハ結紮ノ方法ヲ
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           同年九月十七日(第五手術後二十日目)開腹術、
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 同年八月七日(第三手術後十五日目)開腹術、胃切
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 切開、幽門部潰瘍證明。更ニ邊緣粘膜切除、
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       シ其周圍ニ鹽酸水注入。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   術、胃切開、幽門部潰瘍ノ治癒證明。粘膜ヲ切除
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       開、幽門部ニ三角形ノ小潰瘍證明。周圍ニ十分ノ
                                                                                                                                                                                                                                                                                   ニ鹽酸水注入。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           鹽酸定規液注入。
                                                                                                                                                                                                                                                           以上。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  周圍
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              胃
```

九月十七日ノ第六囘手術後三日目ノ分泌狀態ハ第八十

潰瘍證明、周圍二十分ノ一鹽酸定規液注入。

齋藤、小林―胃潰瘍ノ胃液分泌ニ 誂ァ

爾後加答兒症狀ノ消退ト共ニ漸次胃液分泌ハ恢復シ

ラ標準數ニ達シ術後五―八日或ハ九日位ニシラー兩

Ĥ

期ハ恐ラク潰瘍ノ増惡期ニシテ粘膜ノ刺戟モ

亦最强

シテ従テ分泌ノ亢進ヲ來スモノナランロ

*p*0

而

シテ其分泌亢進時期ニ於ラ開腹術ヲ行ヒラ粘膜ヲ

制セシムルコト能ハズシテ)術後第二日目位ヨリ分泌

ニシテ(或ハ手術的炎性反應モ亢進セル分泌狀態ヲ抑

ルヲ目撃ス (第三試験第二、第三、第四及ビ第六手術 ハ標準線ヲ超越シテ術前ノ分泌與奮狀態ヲ持續セシ 術後)

第一試驗、第二試驗第一囘手術後、第二試驗第一囘手 間胃液分泌ノ著シク亢進スル時期アルヲ目撃ス(例合

以後ハ分泌減退シラ標準線若シクハ標準線下ニ

降

更ニ其周圍ニ潰瘍ノ生成的手術ヲ加フルトキハ其後

、◦ 此時期ハ恐ラク潰瘍ノ治癒期ヲ示スモノナラン◦

第三期ハ分泌再ピ標準狀態若シクハ標準狀態下ニ降

二、若シ又幽門部粘膜ニ潰瘍ノ殘存スル時期ニ於ラ

分泌試験ニ於テハ手術的炎症ノ影響ヲ認ムルコト僅カ

分泌ハ著シク抑制セラレ後漸次標準狀態ニ恢復ス。

一期ハ分泌亢進期ニシテ兩三日間ニ過ギズの此時

一期ハ術後約七日ニシテ手術的影響ニヨリテ初メ

入セシ場合ハ術後十四日ヲ經過スルモ未ダ治癒シアラ

胃粘膜ヲ相竝ビテ二箇所ニ結紮スルトキハ

(第二試

ルヲ認メタリ°(第三試驗第二手術)°

圍ノ粘膜下組織ニ十分一鹽酸定規液一五立方仙迷ヲ注 リシヲ實驗シ(第二試驗第二手術)、一部ヲ結紮シ其周

期ヲ劃スルヲ得ルガ如シ○

時期ニ遭遇スルヲ常トス(例令第二試驗第二囘手術 驗第四囘手術*第三試驗第二囘手術)又ハ全ク治癒セル 潰瘍ハ殆ド治癒セントセル時期ニアルカ(例合第二試 降セル時期ニ開腹術ヲ行ヒ胃粘膜ノ檢査ヲ行フトキハ 驗第三囘手術後及ビ第三試驗第二囘手術後)、其分泌下 檢スル時ハ常ニ粘膜ニ潰瘍ノ存在ヲ認メ(例合第二試

Ŀ

シ場合ニ最モ速カニシテ術後十三日以内ニ治癒シア

三、手術的ニ生ゼシ幽門部潰瘍ノ治癒ハ粘膜ヲ切除

後)。

如斯幽門部ノ手術的胃潰瘍ノ分泌狀態ニハ明カニ三

齊藤、小林―胃胃瘍ノ胃液分泌ニ酰テ

雖モ手術的潰瘍狀態ニアリテハ一

第五手術)。 ナル潰瘍ノ殘存セルヲ見タリ(第三試驗第四手術及ビ 内ニ十分一鹽酸定規液ヲ注入スルトキハ治癒ハ甚シク ヲ作リ更ニ治癒ニ傾キ三週間以内ニ於テ治癒スルガ如 五立方仙迷ヲ粘膜下組織内ニ注入スル時ハ更ニ大潰瘍 其殘存セル小潰瘍周圍ニ十分一鹽酸定規液ノ一〇―一 遷延セラレ術後二十一日ニ至ルモ獪ホ直徑三仙迷ノ大 痕及ど其周圍粘膜ヲ廣ク切除シ更ニ周圍ノ粘膜下組織 シ(第二、第三、第四、第五手術)。 四、胃潰瘍ノ殆ド全治癒ヲ達セントスル時期ニ於テ 五、獪ホ分泌ニ就キテハ旣ニ第二試驗第二手術後 瘢痕形成及ど粘膜下組織ノ浸潤硬結セル部ニ於テ瘢

観察ニ於テ記載セシガ如ク標準狀態ニ於テハ試食ニ對 時間後ハ分泌ハ殆ド静止ノ狀態ニ至ルヲ通常トス 時間後ニ至ルモ分 多症ニアラズトイフヲ得ザルベシロ 雖モ或ハ又固定器上ニ於テ牛乳ヲ得ル習慣ニヨリ食慾 度〉。(第三試驗第七十一表及ビ第七十九表以下)。 タシト雖モ其ノ分泌ノ比較的有力ナルヲ目撃スルト ヲ亢進シ胃液分泌ヲ興奮セシムルコトナキヲ保證シガ 瘻孔周圍蓍シク糜爛シ犬ハ絶エズ創面ヲ甞ム。此關係 ハ或ハ又分泌亢進狀態ノ結果トシテ發現シタル分泌過 ニ於ラ空腹時ニ分泌ヲ來スコトナキヲ保證シガタシト パウローフ氏小胃ヲ有スル犬ヲ長ク使用スルトキハ

狀態ヲ見ルコト稀ナラズロ

泌ハ靜止狀態ニ達セズシテ稽ホ○・五立方仙迷ノ分泌

百十分ノ後ニ至ルモ猶ぉ〇・三立方仙迷ノ分泌狀態

遲延ショ二十四日ニ至ルモ猶ホ小潰瘍ノ殘存ヲ見タリ

職第二手術)治癒ハ一箇ノ場合ヨリ遅キハ當然ナリ猶

ホ此際開腹術ニョリテ治癒ヲ攪亂セシヲ以テ治癒大ニ

ヲ維持スル場合ヲ目撃スベシ(第六十九表)。 此ノ關

係ハ分泌ノ減退セル時期ニ於ラモ同様ナリ(第八十五

表)°

試食ヲ投ゼザル空腹時ニ於ラモ胃液分泌ノ絕エス存 六、猶ぉ第三試驗第四囘手術以後ニ注目セシハ未

胃液ヲ分泌ス。(最高○・八─一・○立方仙迷酸度七十 トノ事實之ナリの即チ朝空腹時ニ於ラ小胃ヨリ絶エズ

七二九

齋藤、小林―胃潰瘍ノ胃液分泌ニ就テ

第

四試驗

ニ關係ヲ有スルニアラザルカ卽チ幽門部ニ潰瘍存在ス

第一、第二、第三試験ニ於ラハ先ヅ犬ニパウローフ氏

定メ後チ開腹術ヲ舉行シテ胃ヲ腹腔外ニ取出シ大胃前壁 ニ切開ヲ作リ幽門部後壁粘膜ヲ飜轉シ此部ニ手術的ニ粘

碍ヲ結果シ胃腺ニ對スル食餌的刺戟ノ强盛ヲ來シ過酸症

浸潤ノ結果此部ノ腫瘍狀硬結ヲ來シ爲メニ食餌ノ輸送障 强ナルベク且幽門痙攣叉ハ幽門部ニ頻囘手術ヲ施スタメ 時ハ潰瘍ハ他部ニオケルヨリ食餌的刺戟ヲウクルコト最

ヲ續發セシムルコトナシトモ限ラズロ

之ヲ以テ第四試驗及ビ第五試驗ニ於ラハ可及的幽門部

小胃手術ヲ施シ手術創ノ治癒セル後小胃分泌ノ標準量ヲ

瘍ノ存在スルガ爲メニ粘膜ノ知覺過敏ヲ來シ胃腺ノ反應

而シテ第二期ニオケル分泌亢進ニ就テハ胃粘膜面ニ潰

亦亢進ヲ來ス爲ナルカ將タ又潰瘍ヲ作成スル所ノ部位

平均シテ左ノ標準表ヲ得タリo

同月十四日ヨリ十五日マデー定試食(牛乳五○死肉「エキ ス」一兎)ニ對スル分泌ヲ觀察シ數日ノ分泌量及ビ酸度ヲ

フ氏小胃手術ヲ行ヒ創面ノ治癒スルヲ待チニ週間後即チ

先ヅ中等大ノ犬ニ就キラ大正九年十二月一日バウロ

ŧ

即チ第一期ハ手術影響ノ時期ニテ分泌減退ヲ見、第二期

祭セリロ

ルニ其治癒ニ至ル迄ニ明カニ三期ヲ區分シ得ルガ如シ

潰瘍存在スル期ニテ分泌ノ著シキ亢進ヲ示シ、第三期

シ前ニ作成セシ潰瘍狀態ヲ檢査シ同時ニ更ニ手術的處置 **變狀ヲ來セルヲ目撃スルトキハ開腹術ヲ行ヒラ胃ヲ切開** 觀察シテ前後ノ分泌量及ビ酸度ヲ比較シテ其分泌狀態ノ 膜缺損ヲ作リ胃壁及ビ腹壁ヲ縫合シ翌日ヨリ分泌狀態ヲ

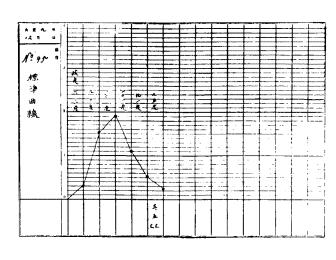
・加へタル後又分泌狀態ヲ觀察セリ゜其試験成績ヲ通覽

後チ前試験ト同一方法ノ下ニ分泌ヲ觀察シ潰瘍發生部位

門部ニ近ツキテ潰瘍ヲ作リテ後チ胃壁及ビ腹壁ヲ縫合シ ヲ離レテ胃前壁ヲ切開シ後壁粘膜ヲ飜轉シ可及的噴部噴

ノ異ルニ從テ**分泌量及と酸度ニ差異ヲ現ハスャ否ャヲ觀**

ハ治癒期ニラ分泌ハ正常又ハ其以下ナリロ



粘膜結紮(卽チ相竝ベル二箇ノ粘膜結紮)ヲ作リ卽チ冑壁

結紮絲ヲ以テ結紮シ更ニ相接近シテ獪ホ一箇ノ同樣ナル

アン」鉗子ヲ以ヲ胃粘膜ヲ撮ミ擧ゲ此ノ部ノ基底ヲ太キ スル切開ヲ作リ此ノ創孔ヨリ後壁粘膜ヲ飜轉四箇ノ「ベ

及ピ腹壁ヲ式ニ從ヲ縫合ス術後生理的食鹽水二〇〇・〇

見べっ

孔右側ニ於テ正中線ニ平行シテ約十仙迷ノ縦切開ヲ作リ

旣ニ標準表ヲ得タルヲ以テ十二月十九日同犬ニ就テ瘻

ラ開腹術ヲ行ヒ胃ヲ腹腔外ニ取出ス。 大胃周圍ニ癒著ヲ

可及的噴門部ニ近キ前壁ニ於テ約五仙迷ノ長軸ニ平行

第 九 十五表

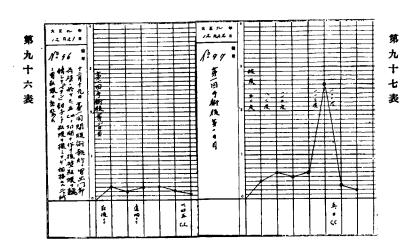
術後經過良好。第二日目ヨリ同犬ヲ固定臺ニ固定シ分

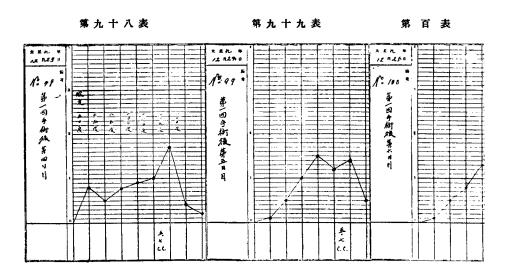
泌狀態ヲ觀察セリロ

ヲ皮下ニ注射シ獪ホ「カンフル」阿列布油三筒ヲ注射セ

y o

七三一





十二月二十一日(手術後第二日目)ヨリ成績ヲ通覽スル

混ジ第二十分ハ混濁三十分以後ハ透明ナル胃液ヲ分泌セ シト雖モ分泌量ハ甚ダ低クシラ各十分○•二─○•三立方 二此日ハ手術的影響ヲ明カニ認メ初メノ第十分ハ粘液ヲ

仙迷ヲ示スニ過ギズ0 第三日目ニ於テハ術後ノ影響ハ旣ニ去り初メヨリ透明

二•六立方仙迷ニ達セル關係ハ不明ナレ共前日(卽チ手術 五立方仙迷ノ所ニアリシガ第五十分ニ至リラ急ニ上リラ

ナル胃液ヲ分泌シ四十分マデハ各十分ノ分泌〇・四―〇・

後第二日目)!分泌ハ一時間!分泌總量只僅カニー•四五

立方仙迷ナリシニ第三日目ニ於ラハ一時間ノ分泌總量

五・○立方仙迷ニ上リテ標準量ノ近キ酸度ノ如キハ著シ

ク上リテ標準酸度ヲ遙ニ超越セリo

超越セリの 雖モ初メ五十分間ノ分泌量ハ各々十分エ於テ増加ヲ示シ 標準量ニー致シ酸度ハ前囘ノモノヨリ低キモ標準酸度ヲ 示セリー時間ノ分泌總量ハ五・七立方仙迷ヲ示シラ殆ド 分泌最高時ハ十分時遲レテ第六十分トナリ多少ノ低下ヲ 第四日目ノ分泌曲線ハ前日ノモノト略ボ同性質ナリト

41

齋藤、小林―胃濱濂ノ胃液分泌ニ就テ

タリシ放ハ前年暮ヨリ教室内ニテ小犬ヨリ飼養セルモ テ第四十分及ビ第五十分ニ於ラハ百十三度乃至百十六度 四試驗ヲ中止セザルベカラザルニ至レリ本試驗ニ使用シ ヲ示セリロ 第六日目卽チ十二月二十五日不意ノ出來事ノ爲メニ第

望セシメタルコト大ナリキの 此朝圖ラズモ腹壁縫台創ヲ搔キ破リ多量ノ出血ヲ來シ頓 二著シク衰弱シ試験ニ堪へザルニ至リシハ余等ヲシテ失 ニシテ柔順如何ナル事ヲナスモ余等・意ノマヽナリシ 前囘ノ試驗中絕セシヲ以テ本年一月二十七日中等大ナ 第五 試 驗

ル柔順ナル黑牝犬ヲ選ビハウローフ氏小胃手術ヲ行ヒ ビ酸度ノ平均數ヲ得テ標準曲線ヲ得タリ第一〇一表ハ卽 分泌ヲ観察シ此五日間ノ數ヲ平均シラ各十分間分泌量及 日一定試食卽チ牛乳五○・○瓦及ビ肉越幾斯一瓦ニ對ス 面ノ治癒ヲ待チ二月七日ヨリ同月十二日ニ至ル五日間連

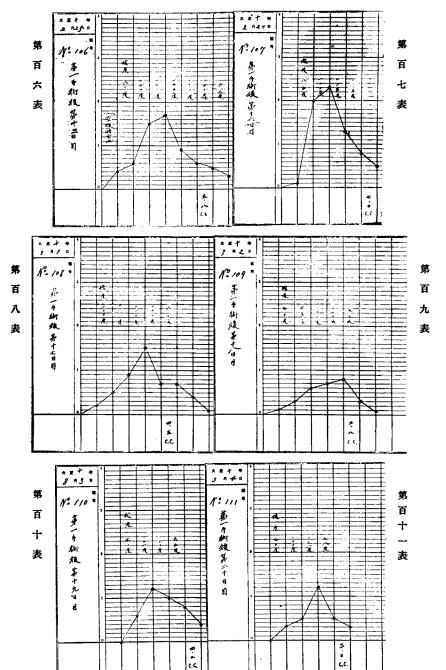
チ之レナリロ

ヲ作リ後壁粘膜ヲ飜轉シ可及的幽門ニ接近シラ五十錢銀 線ノ小胃瘻孔ノ右側ニ於テ約十仙迷ノ切開ヲ作リラ開腹 及ど「エーテル」麻酔ニ乗ジ犬ヲ固定シ腹壁ヲ消毒シ正中 シ胃ノ腹腔外ニ出シ大胃前壁ニ於テ約三・五仙迷ノ切開 旣ニ標準曲線ヲ得タルガ故ニ二月十二日「モルフェン」 Ħ 表 A 440 4 A: 101 標準由 榝 五二

術後生理的食鹽水二○○・○立方仙迷ヲ皮下ニ注入シラ 定規液ノ一〇立方仙迷ヲ注射シテ後胃壁及ピ腹壁ヲ閉デ 貨大ノ粘膜切除ヲ行ヒ周圍ノ粘膜下組織中ニ十分一鹽酸

第 百 == 表 これが、おは眼路を大人麻横印稿、行の南の、方人というが、あらればらかが作りを被しないない。 コーストーは開放断執行者の理察のはん大者有人 第一年初政王 13 5 -c.c,

術ヲ終レリo 術後經過良好。第二日目ヨリ分泌狀態ヲ觀察セリロ



ヹ゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙

	日マデハ不得已事情ノタメ觀察 第	y o	ク示セシモ最高ニ於タ大差タ示│ ツケ	終りニ八三度ヲ示シ、分泌旺盛 │ 立方仙迷ノ所ニ在リ八十分ニ至リラ漸ク繋
	第十八日目ハ分泌ハ一般ニ少ナク一時間		ツケリ獪ホ酸度ハ最高一一一度ニシテ標準	仙迷ノ所ニ在リ八十分に
を記せ	ツナクーは		度ニシテ	三至リテ漸り

45 サズロ ナリシ間ハ一〇〇度以上ヲ 八六度、最高一一二度、終 高一一一度、終リニ九七度ナリシニ、此日ノ酸度ハ最初 ガ如シ、而シテ其ノ酸度ハ標準ノ場合ニ初メ七五度、最 過シ且其ノ分泌ハ百分間後ニ至ルモ循ホ全ク靜止セザル 量ハ六・二立方仙迷ニシテー立方仙迷以上ヲ標準量ヲ超 所ニアリテ標準曲線ニー致スレドモ其ノ一時間ノ分泌總 試験食投與後モ中等度ノ分泌ヲ示セリ。 第八日目ョリ第十二日日 第七日目ニ至ル時ハ各十分間ノ分泌最高ハ第三十分ノ

ヲ興奮狀態ニ至ラシムルニ長時間ヲ要スルモノナルガ如 第四日目ハ空腹時ノ分泌モ初メノ十分間ニー立方仙迷

二於テモ小胃中ノ胃腺ハ有力ナル分泌機能ヲ有スルモ之 カニ分泌ノ高マレルヲ見ルノミ。此表ニ依ル時ハ手術後 響トシラ分泌ハ著シク侵サレ第三日六十分以後ニ於テ僅 タル成績ヲ通覽スルニ術後第二日及ピ第三日ハ術後ノ影

二月十四日ヨリ三月四日マデノ第一囘手術後ニ観察シ

スルヲ得ザリキロ

第十三日目(二月二十五日)分泌量ノ曲線ハ殆ド標準線

ノ所ニアリロ 迷ヲ示シ、猶非酸度ノ如キモ最高一二五度ヲ示セリ、分 ニ至ルモ分泌ハ終リニ近ヅカズシテ獪ホ○・五立方仙迷 泌ノ持續モ又恐ラク長ク持續スルモノナルベク六十分後

持續ハ標準狀態ヨリ遙カニ長クシテ六十分ニ猶ホ〇・七 五立方仙迷ニシテ標準量以下ニ下レリ、然レドモ分泌ノ 三三度ニ達スルヲ見ルロ ク 地加シ第二十分 二二立方仙迷、第三十分二二・三立方仙 スルヲ見ルモ其ノ酸度ニ至リテハ著シク高マリテ最高一 **分泌總量ハ七立方仙迷ニ達シ各十分間ノ分泌量モ又著シ** ニー致シー時間ノ分泌總量ノ如キモ僅カニ標準量ヲ超過 第十七日目ハ分泌量著シク減ジー時間ノ分泌總量四 第十五日目ハ其ノ分泌量ノ増加ハ著明ニシテ一時間ノ 間總量二・八立 準酸度ニー致 靜止ノ狀態ニ近

齋藤、小林―胃潰瘍ノ胃液分泌ニ就テ

方仙迷ニ過ギズ酸度ハ標準酸度ニ一致ス。 第十九日及ビ第二十日目ハ初メ十分間ハ無分泌ニシラ

第

百

+ Ξ 表

且分泌及ビ酸度共ニ標準曲線ニ劣レリ。 ヲ擧行セリロ 三月四日(卽チ第一囘手術後)第二十日目ニ第二囘手術

同ジク約十仙迷ノ腹壁切開ヲ作リ胃ヲ腹腔外ニ出シ前壁 第一囘手術ノ開腹線ヨリ僅カニ外方ニ於ラ之ニ平行

ニ於ァ約三・五仙迷ノ切閇ヲ作リテ後壁粘膜ヲ飜轉シテ

第一囘ニ作リシ潰瘍部ヲ檢スルニ潰瘍ハ星芒狀癥痕ヲ殘 鋏ヲ以テ切リトリ直徑約四仙迷ノ大潰瘍ヲ作リ基底部及 **ノ「ペアン」鉗子ヲ以ァ粘膜ヲツマミ擧ゲ其ノ基底部ヨリ** シテ旣ニ治癒セルヲ認メタリ、依テ此部ニ於ヲ更ニ四箇

從ラ閉デ後チ生理的食鹽水一五〇ヲ皮下ニ注射シツヽ

テ一半「クロール」鐡液ヲ以テ止血シ胃壁及ビ腹壁ヲ式ニ 方仙迷ヲ注射ス此際潰瘍面ヨリノ出血甚ダシカリシヲ以 ビ其ノ周圍ノ粘膜組織中ニ十分一定規鹽酸液一○・○立

試食ヲ與へ分泌狀態ヲ觀察セリ。

術後ノ經過良好。術後第二日目ヨリ犬ヲ固定シラ一定

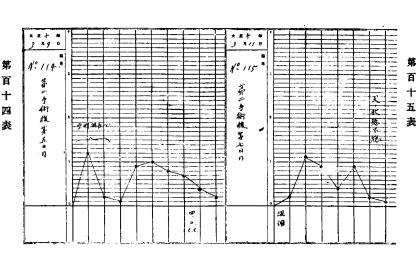
ヲ終レリロ

作。了和"松眼炉隙"作3十万二地板墙板注射火厂、溃疡、星生水、全型的威廉。小228后了,一一当场、星生水、全型的威廉。小228后了,一三百四。第二四問股衝執行、冒社谈、徐《 第二分析後 第四日日 4 5 6.6. ۴

十二表

第

百



見ズ試食投奥後ハ透明ナル胃液ヲ分泌シ來リシト雖モ分其後ノ分泌狀態ハ術後第二日目ニ於テ空腹時ニ分泌ヲ

泌ハ著シク少ナシ。

額スルガ如ク七十分後ニ猶ホ○•三ヶ所ニ在り。 第四日目ハ中等度ノ分泌アリシ。而シテ分泌ハ長ク持

第五日目空腹時ニ於テモ比較的多量ノ分泌アリ試食投

静ヲ缺ギシヲ常トセシト雖モ殊ニ第二囘手術後ハ一般ニ本犬ハ從來使用シ來リシ他犬ニ比シテ固定臺上ニテ安與後ノ分泌モ亦中等ニ恢復セリ。

不穩狀態ヲ呈シ喧噪ヲ極メ分泌試験上多大ノ不良影響ヲ

ニ朋カニ加答兒ノ加ハリシヲ示セルガ放ニ試験ヲ中止ス混濁シ帶赤色ヲ呈シ且比較的多量ノ粘液ヲ混ジ小胃粘膜加シ殊ニ第七日目ヨリハ小胃ヨリ分泌スル胃液ハ著シク良ノ點ヲ發見セザリシモ第六日以後ハ一層不穩狀態ヲ増與フルナラントヲ痛心シタリシニ第五日目マデハ別ニ不與フルナラントヲ痛心シタリシニ第五日目マデハ別ニ不

第四試験ニ於テハ潰瘍ルノ已ムナキニ至レリロ

テ潰瘍ヲ作成シ後チ二十日間比較的詳細ニ觀察ヲ得且第タルニ止マリシト雖モ第五試驗ニ於テハ第一囘手術ニ於第四試驗ニ於テハ潰瘍作成後僅カニ六日間ノ觀察ヲ得

七三九

ヲ作成シテ後一週間ノ觀察ヲ持續シ得タルガ故ニ此試驗

成績ハ第一、第二及ピ第三試験ノ幽門部潰瘍ノ分泌成績

部ニ作リシ場合ト同ジク兩三日間ハ手術的影響ヲ受クロ 後壁ニ於ラ噴門部ニ接近シラ潰瘍ヲ作成スルトキハ幽門

此時期ハ小胃ノ分泌ハ著シク侵サレ且初メノ十分乃至

三十分後ハ普通透明酸性ナリ。

二十分間ハ分泌液多少混濁シ且時々塊狀ノ粘液ヲ混ズ。

スル等ハ第五試験ニ於テモ又之ヲ目撃スルヲ得ベシ。

ノ分泌及ビー定試食ニ對スル**分泌時間ノ著シク延長持續**

其他第一、第二及ビ第三試驗ニ於テ觀察シタル空腹時

第一、 幽門部後壁粘膜若シクハ後壁ニ於テ可及的幽門部ヲ離レテ噴門ニ接近シテ手術的ニ(結紮又ハ切除)潰瘍ヲ作

一試驗乃至第五試驗成績ヲ通覽シテ最後ニ結論ヲナスコト左ノ如シロ

結

誝

成スル時ハ其後潰瘍ノ治癒ニ至ルマデニ於ラ胃液分泌試験上三期ヲ劃スルコトヲ得の

即チ第一期手術影響期ニシ

テ此時期ハ術後五―八日或ハ九日平均一週間ノ間ニ在りo

第三試驗成績ニ對照スルニ全ク同一ニシテ差異ヲ發見ス

二十日目ノ間ニ在リ此時期ニ於ラハ分泌量及ビ酸度ニ於

第三期ハ治癒期ニシラ第五試験ニ於ラ第十五日ヨ

リ第

術ヲ行ヒ粘膜面ヲ檢セルニ作成セル潰瘍ハ旣ニ治癒セル ラ標準狀態ヨリ著シク其ノ以下ニ在リ此時期ニ於ラ開腹 第四及ビ第五試験成績ヲ總括シテ之ヲ第一、第二及ビ

ルヲ得ズ。卽チ同ジク明カニ三期ヲ區別シ得ルガ如シo

一期ハ手術ノ影響ヲ受クル時期ニシテ人工的ニ胃ノ

ヲ見セリロ

泌狀態ヲ研究スルノ資料トナスヲ得ベキカ。

ニ對照シテ後壁ニ於ケル噴門部附近ニ作成セル潰瘍ノ分

此時期へ其ノ分泌量ニ於テ其ノ酸度ニ於ラ遙ニ標準量及

第五試験ニ於テハ第七日目ヨリ第十五日目ノ間ニ圧

ピ標準度ヲ超越セリロ

齋藤、小林―胃潰瘍ノ胃液分泌ニ就テ

第二期ハ分泌亢進ノ時期ニシテ恐ラク潰瘍ノ存在シテ

粘膜ノ知覺過敏胃腺細胞ノ反應亢進ヲ來ス時期ナリロ

共ニ漸次胃分泌ハ恢復シテ標準敷ニ達ス。 後チ之ニツヾクニ第二期卽チ分泌亢進期ヲ以テス。此ノ時期 ラハ兩三日時トシラハ七日間位ナリ。 此時期ニ於ラハ分泌量及ビ其ノ酸度ハ標準數ヲ超越シ明カニ過酸症ノ成立 分泌狀態ヲ呈シ小胃粘膜モ亦多少加答兒的影響ヲ蒙リ分泌液ノ混溷粘液ノ混在ヲ認ム。 爾後加答兒症狀ノ消退ト シテ衛後兩三日間 時トシテ五日間ハ手術ニ因スル胃壁及ビ腹膜ノ炎性反應ノ為メニ著シキ影響ヲウケ殆ド無

標準狀態者シクハ標準下ニアリの 此時期ニ於テ開腹術ヲ行ヒテ胃粘膜ヲ檢スレパ殆ド治癒セントスル時期ニアル 知覺過敏ヲ來シ胃腺ノ刺戟最强ニ達シ從ヲ分泌亢進ヲ來スモノナラン。 第三期ハ治癒期ニシテ分泌量及ビ酸度 此際開腹術ヲ行ヒ胃粘膜ヲ檢査スル時ハ 常ニ粘膜ニ潰瘍ノ存在ヲ認ムルヲ以ヲ恐ラク潰瘍ノ増惡期ニテ 粘膜

ヲ認ム○

第二、 若シ又幽門部粘膜ニ潰瘍ノ存在スル時期ニ更ニ其ノ周圍ニ潰瘍ヲ作成スルトキハ其ノ後ノ分泌試驗ニ於ヲ手 **泌亢進狀態ノ存スルガ放ナルベシo** 術的炎性影響ヲウクルコト甚ダ少ナク術後第一日ヨリ比較的多量ノ分泌ヲ來ス。 之レ恐ラクハ旣ニ潰瘍ノタメ分 | 又ハ圣治癒ヲ來シテ癥痕ヲノコセル時期ニ遭遇ス○

第三、手術的ニ作成セシ幽門部潰瘍ノ治癒ハ粘膜ヲ切除セシ場合ニ尤モ速カニシミ術後十三日以内ニ治癒セシ 擊シ(第二試驗第二手術)、粘膜一部ヲ結紮シ其ノ周圍ノ粘膜下組織ニ十分一定規鹽酸液一五立方仙迷ヲ注入スル ヲ目

トキハ潰瘍ノ治癒ハ大ニ遲レ術後十四日ヲ經過スルモ治癒セザルヲ寳喩セリ(第三試驗第二手術)。

ベル二箇ノ結紮ヲ施ストキハ其ノ治癒大ニ遲延スルガ如シロ 酸液ヲ注入シタル場合ニ術後二十日ノ開腹術ニ於テ星芒狀癥痕ヲノコシテ治癒シアルヲ實驗セリ。 レドモ第五試驗第一手術ニ於ラ行ヒタル後壁粘膜ニ直徑約三仙迷大ノ粘膜ヲ切除シ 其ノ周圍ニ十分一定規鹽 胃粘膜二相竝

49 胃潰瘍ノ殆ト全治癒ニ達セントスル時期ニ於テ其ノ殘存セル小潰瘍周圍ニ十分一定規鹽酸液ノ一〇―一五立

齊藤"小林-胃潰瘍ノ胃液分泌ニ就テ

方仙迷ヲ粘膜下組織内ニ注入スル時ハ更ニ大潰瘍ヲ作リ其ノ後治癒ニ傾キ三週間以内ニシテ治癒スルガ如シο

周圍ノ粘膜下組織中ニ十分一定規鹽酸液ヲ注入スルトキハ 健康ナル粘膜ニ同手術ヲ加ヘシ時ヨリハ治癒ハ遅延セ ラレ術後二十日ニ至ルモ獪ホ比較的大ナル潰瘍ノ磋存スルヲ見ルo | 敷痕形成及ど粘膜下組織ノ浸潤硬結セル部位ニ於ヲ敷痕及ど其ノ周圍粘膜ヲ直徑約三仙迷大ニ廣ク切除

シ更ニ

第五、 標準狀態ニ於ラハ試食ニ對シラー時間後ハ分泌ハ殆ド靜止ノ狀態ニ至ルヲ通常トスト雖モ手術的潰瘍作成後 ノ狀態ニアリテハ試食ニ對シテ一時間後ニ至ルモ靜止ノ狀態ニ達セズシテ 猶ぉ○・五立方仙迷ノ分泌ヲ見ルコト

巡い固定前ニ犬ガ小胃瘻孔ノ糜燗面ヲ絶エズ甞メタリシ影響ニヨルカ 或い又固定臺上ニテ必ズ試食ヲ得ルノ智慣 退セル時期二於ラモ同様ナリの 稀ナラズ。時トシテハ百十分ニ至ルモ猶ぉ○•三立方仙迷ノ分泌狀態ヲ維持スル場合ヲ目撃ス。此關係ハ分泌ノ減 人工的潰瘍狀態ニ於ラハ未ダ試験食ヲ奥ヘザル空腹時ニ於ラ小胃ヨリ相當ノ分泌アルヲ目撃ス。 而シテ此分

ス議論ト胃潰瘍ノ結果的現象ナリトノ主張ト何レガ正鵠ヲ得タルモノナルヤハ遽ニ制定シ難シト雖モヽ ヲ連想シテ所謂食慾胃液ナルャハ不明ナリ。 手術的ニ作成セル胃潰瘍ニ於ラ種餐的ニ過酸症ヲ成立セシム。過酸症ヲ以ラ胃潰瘍生成ノ原因的轉歸ト見做 兎ニ角手

第八、 手術的ニ潰瘍ヲ胃粘膜ニ作成スルニソノ幽門部ニ作レルトソノ後壁ニ於テ噴門ニ接近シテ作レルトヲ問ハズ 分泌上ノ試驗成績ハ殆ド差異ヲ發見セズ。

術的ニ作成セル胃潰瘍ニ過酸症ノ癥襞スルハ事實ナリロ

第九、 手術的ニ作成セル胃潰瘍ハ治癒的傾向甚ダ蓍明ニシテ高度ノ續發的過酸症ノ存在スルニモ拘ラズ、又此際小 ノ如キモ甚ダシタ侵害セラル、狀態ニアルニモ拘ラズ 潰瘍ハ速カニ治癒ニ向ヒ数日ニシテ成立セル過酸症ハ減退 胃ョリ分泌シ來レル胃液ハ强酸性ニシテ酸度ノ如キハー三三度以上ヲ示シ 消化力旺盛ニシテ腹壁瘻孔周圍ノ外皮

第十、以上ノ事實ヲ以テ見ルトキハ此際成立セシ過酸症ハ作成セシ潰瘍ノ底又ハ縁部ヲ又ハ胃壁ノ切創経合部等ヲ 消化スルノ傾向ヲ有セスシラ、 潰瘍及ビ切開創ノ癥痕形成ニハ全然無關係ナルガ如ク比較的迅速ニ治癒ヲ遂ゲシ シテ正常ノ分泌狀態ニ復歸スロ 而シテコノ正常ニ復セル時期ハ潰瘍ノ治癒セルヲ示スハ結論第一ニ述ベタルガ如

説明スルヲ得ベカラズロ モ慢性胃潰瘍ヲ成立セシムルヲ得ズ。 慢性胃潰瘍ノ成立スルニハ何等カノ理由ノモトニ一定ノ胃粘膜部ニ持續的 ニ抵抗減少部ヲ見ザルベカラザルベク 又人體ニ於ケル慢性胃潰瘍ノ治癒シ難キ理由ハ過酸症ノ合併ノミヲ以テハ ム。 粘膜下組織ニ浸潤ヲ來セル瘢痕部又ハ周圍組織ニ鹽酸液ヲ注入スルトキハ少シク潰瘍ノ治癒ヲ遷延セシムル